



発行所
カトリック長崎大司教区
本部事務局
〒852-8113
長崎市上野町10-34
カトリックセンター内
TEL 095(846)4246
FAX 095(842)4460

「開かれた教会」

山長 豊實

(長崎教区信徒)

教会観光ブームに寄せて

最近、教会観光への関心が高まっています。信仰を求める人に加え、「教会巡り」の人々、長崎字や郷土史研究でキリスト教を学ぶ人も増えてきました。自治体も力を入れていくようです。

受洗前の私には、教会は近寄りがたいものでした。聖フランシスコ・ザビエル渡来四百年記念行事で聖腕を長崎に迎えた年、学生だった私は、来日したポルトガルの信者のお世話で、行事に参加しました。しかし、その折の私や友人のキリスト教への関心は、その時だけのものでした。これは「求める心」の欠如ですが、教会からの「呼びかけ」や「招き」も当時はあまりなかったように思います。

今の状況はかなり変わりましたが、信者数が全国で二番目の長崎教区であっても、まだまだ私たち信者は少数派です。その中で、多くの方々が自ら近づいてくださるのは嬉しいことです。知っていたくことは宣教の第一歩だと考え、この機会を大切にすべきだと思えます。単なる観光で来られる方々もあろうかと思いますが、どんな動機であれ、神の家を訪れるということの意味を再確認したいものです。そこで、長崎の教会を世界遺産にする会に名を連ねている者の一人として、夢みたいなことを述べてみたいと思います。

第一に、訪れる人が単に見るだけでなく、信仰や歴史を理解できるよ

う、環境整備ができればいいと思います。案内や説明をする人をボランティアからでも得られれば、訪問者の助けになることは確実ですが、無理な話でしょうか。また、長崎のキリスト教に関する歴史資料を一堂に集めた資料館ができれば、観光客に加え、研究者もひきつけることは確実です。とにかく、内部にいて慣れてしまった信徒には感じとれない深いものをとらえている人々がいる、ということに気づかされることがしばしばです。

かつて、迎える人の謙虚さに心をうたれた経験があります。アシジの聖フランシスコ大聖堂を訪ねた折、長崎出身の修道士が日本人の案内をしてくださいました。大聖堂、壁画、聖人についていねいに説明してくださったあと、最後に「このように詳しく語られることを、謙虚な聖人は恥ずかしく思っているでしょう」と静かに結ばれました。その静かな言葉を聞いた時の見学者の表情には、感動がありました。親切に、差別なく、謙虚に接することの大切さを痛感します。

この観光ブームは、そういう信者になるために神さまが私たちに与えてくださった恵みなのかもしれません。い、という思いさえ浮かんできます。これが第一点です。

第三は、まったく奇抜な発想かもしれませんが、一般市民の方々のミサへの参加です。教会を単に見るだけでなく、その中で良い時間を共有する喜びは、信者の想像を越えるものでしょう。ローマのポポロ広場の近く、双子教会の一つで、主日のミサ中に知人の日本女性が聖歌を歌ったことがありました。これはすぐれた新人を見出し、育てる目的もあると聞いています。主日のミサの聖体拝領中、広い聖堂に彼女の聖歌が流れました。信者でない彼女は、主日のしかも聖体拝領のさ中に歌う機会を与えられた感動に、ふるえています。教会活動、宗教行事にも、可能な限り一般の人を迎え、共に参加していただくなら、教会はさらに開かれたものになると思います。

「開かれた教会は、「開かれた心」から生まれることはいまでもありません。その根底はやはり愛。そして、愛はサービスです。潜伏キリシタンの時代から、「愛」ということはの代わりに、信者たちは「大切に」という表現をしてきたことを、故片岡弥吉先生にうかがったことがありました。「大切に」ということは、観光ブームが訪れつつある今の長崎教区にとっては、これまでの単なる観光を超えさせるためのキーワードであるような気がしています。

そのとき生まれた教会は、世の雑音のまっただ中で生きながら、その中に救いのみ手を観じ、これを世に示す使命を帯びています。

Q. 人が動けば金が落ちる。だから、これまで未開発の観光スポットとして教会群に目を向けた、というのが一般の考え方ではないでしょうか。

A. 長びく不況の中で長崎の観光客も伸び悩んでいますから、当然そういう考えも出てくるでしょう。人は霞（かすみ）を喰って生きるわけにはいきませんし、経済の活性化も必要なことですから、一概にそういう考えはよくないとも言えません。

また一方、「これまでの通り一辺の観光の時代は終わった」という考えも、少しずつ一般社会に芽生えてきているようです。それを裏返せば、本来の観光の時代が来つつあるという予感がたまたまよっている、ということではないでしょうか。

イエスさまの救いの業の仕上げも、雑音の中で成し遂げられました。エルサレム入城も、まったく意思の違う群集とともに、虚しいざわめきの中で進められました。

いつしか教会は、宣教のための足を止めてしまい、出かけることがなくなりました。そのために外側から足を運ぶ者が現れて来てい

る、と考えるべきではないでしょうか。

Q. いまの教会観光ブームは、本当の福音宣教と結びつくのでしょうか。

A. 結びつくかというより、結びつけるべきだと思えます。具体的方法は、これから時間をかけて、実際に対応しながら積み上げていくべきでしょう。

長崎の教会群を世界遺産に、という動きも見られます。これについても、教会側から頼んだわけでもないのに迷惑な話だ、という意見もあります。

しかし、ここでもいろいろな思惑を超えた「光」を「観じる」必要があります。というのは、教会の古くて重厚な建物だけならば他の所にもいくらでもあるからです。この運動をする方々が観じているのは、そんなことではなく、ある一定の地域にこれほどの教会群があること、そしてこの建物を中心として長い間営まれ編みこまれて来た人間模様がある、ということだと思います。そんな奥深いものを観光しようというねらいがあるようです。

開くか開かないかということより、どのようになら開くかが問われていると思います。訪れる方々の雑音の中で発せられるイエス様の「エツファタ（開け）」（マルコ7・34）というみことばに、じつくり耳を澄まして聴き入りたいものです。

最後に、具体的「対策」として、逆説ではありますが、ドイツのエーリッヒ・フリードという詩人の詩をご紹介します。この詩は、ドイツの中学校などでは教材としても使われているそうです。

「対策」

（村木真寿美訳）

なまけ者を殺す 世の中は勤勉になる
醜いものを殺す 世の中は美しくなる
おろか者を殺す 世の中は賢くなる
病人を殺す 世の中は健康になる
悲しんでいる人を殺す 世の中は愉快になる
年寄りを殺す 世の中は若返る
敵を殺す 世の中は友だちばかりになる
悪者を殺す 世の中は善くなる

教会の扉を閉じる

静かな聖なる雰囲気が生まれる



教会の中で行う活動を「カトリック・アクション」と呼び、それらの活動は位階制度の元にある道具なので、その腕のような役割を果たすべきだ、と説明なさいました。

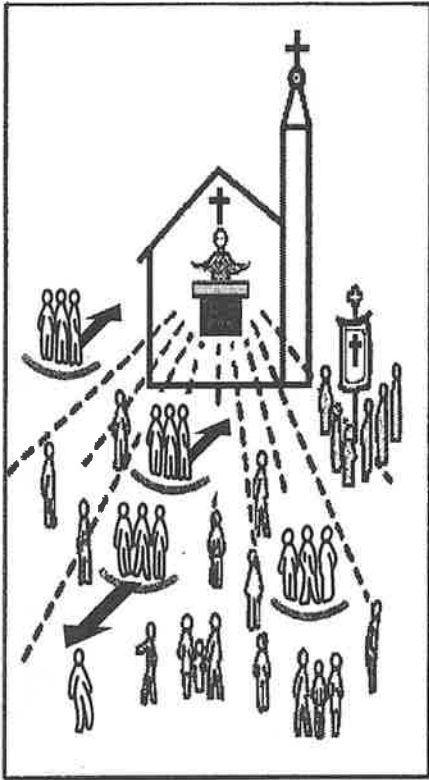
②そして1957年に開催された「カトリック・アクション第二回世界会議」の席で、カトリック・アクションとは「信徒使徒職」のことであり、たとえ教会の命令によって行われるものであっても「位階上の使徒職」とはならないと説明して、洗礼によってすべての信徒に授けられる使命の範囲を指摘なさいました。

③この問題は、その5年後にヨハネ23世によって開催され

た第二バチカン公会議においても取り上げられました。最終会期に「信徒使徒職に関する教令」という形でまとめられ、その重要性がより強調されることになりました。

④戦後の日本の教会も、このような世界の動きに対応しながら、信徒使徒職活動に大きな力をそそいできました。以前よく耳にしていた活動団体には、レジオ・マリエ、ヴィンセンシオ・ア・パウロ会、カトリック青年労働者連盟(JOC)、勤労者連盟、などがありました。

⑤1957(昭和32)年に第一回長崎教区信徒使徒職大会が開催されてからは、教区内での活動も盛んになりました。



しかし、これらの活動団体も、半世紀近くを経た現時点では、その数も減少し、数えるほどしか存在しません。また、昔若かった会員たちがそのメンバーのままの状態でも年月が経ってしまっているようにも感じられます。昭和30〜40年代に大いに活躍していた活動団体のことを知っている者にとっては、さびしい現実ではないでしょうか。司祭にとっても信徒にとっても、何か魅力がなくなっただけでしょうか。

4. これでもいいのか

活動団体中心の小教区に行く「忙しそうな教会だな」と感じる人が多いでしょう。いつも何が進行していて、信徒たちは常に活動しています。そして司祭たちも、指導司祭として活動団体の集会に出席することになります。活動が活発であればあるほど、対応に忙殺されていきます。

これが理想的な小教区で、教会のあるべき姿だ、と考える人も多いのではないのでしょうか。しかし、このような考えに疑問を抱い

ている人も少なからずいるはず。第一の問題点は、「燃え尽き症候群」の増加です。特にリーダーたちは、忙しすぎると霊的な面がおろそかになり、奉仕者としての精神を忘れ、「仕切り屋」や「行事屋」になってしまいう危険があります。燃え尽きたメンバーの中には、もう二度とやるまいという決心をする人さえ出てくるようです。

第二に、活動に参加する人の数が限られてくる、という問題もあります。活動団体が大きい活動している小教区であっても、はたして何パーセントの信徒がその活動に実際に参加しているかを調べてみると、その数字はそれほど高くはないのではないのでしょうか。

このタイプの小教区は活動的だといえるでしょうが、はたして私たちが理想とする小教区の姿は、このようなものなのでしょうか。

今回は、第三のタイプの教会像として、「小教区評議会中心の教会」について考えます。

しみの神秘」の中で十字架上的「死」の出来事を黙想し、「栄光の神秘」の中で「復活」という「救いのみわざの完成」の出来事を黙想する。そこで黙想される他の11の出来事もそれら「基本的三神秘」にいっしょに付随したもので、すべて「直接の」黙想の対象とされてきた。

「公生活」は、これまで「含蓄的・間接的」な黙想対象

では「公生活」はどうなっていたか。黙想の「含蓄的・間接的」な対象だった。

イエスの生涯のすべての出来事は「受肉」の秘義の展開としてのイエスのペルソナの秘義と解されるから、公生活の出来事もそこで「含蓄的・間接的」には黙想の対象とされていた。また、「死」にしても公生活中のイエスの言動が裁判・処刑の原因になって信者を知って居るから、「苦しみの神秘」で「直接的」には受難の5つの出来事を黙想しながら、同時に公生活中のイエスの活動についても「間接的・含蓄的」には黙想していたことになる。

これからは、「光の神秘」で「直接的」な黙想の対象

今回の変更で、「公生活中のイエス」の出来事も「直接」に黙想の対象となることになった。

教皇の判断では、「公生活中のイエス」の神秘はロザリオがこれまで尊重してきた三神秘に劣らぬ重要性をもっている。これを「光の神秘」と名づけて新たに加え、これからはイエスの公生活の主な出来事も「直接に」黙想できるようにしたい、という。カトリック信者が聖母と共にイエス・キリストにより近づき、その神秘により深くあずかるための助けとなることこそロザリオの祈りの重要な使命だから、詩編との類似などには縛られず、キリストにより親しむための「神秘」の数を増やす、というのである。

イエスの「公生活」の重要性

カトリックの信仰にとってイエスの公生活の意義は大きいので、ロザリオの祈りの黙想で「直接的」な対象とされることは確かにふさわしい。

イエスの公生活は人となられた神の御子の、啓示者すなわち「世の光」としての活動であり、神のみことばとしての働きであった。イエスは神の国の到来を告げ知らせ、御父の本当の姿を皆に現し、ご自分が誰であるかを示し、またいろいろ大切なことを教え、愛の手本を与え、温かいことばやまなざしで多くの人を癒し、奇跡を行い、弟子たちを教育された。

イエス・キリストの生涯を伝える四福音書からわたしたちに示されるイエスの姿は、圧倒的に「公生活」におけるものが多い。「公生活」の重視は、「受肉・死・復活」の重要性を曖昧にするどころか、むしろそれをより生き生きと浮き彫りにする効果を生む。

イエスの「公生活」と聖母マリア

イエスの公生活への聖母の参与についても福音書は伝えている。ルカはマリアが生涯を神の救いのみわざへの奉仕のために捧げる決意を固めていたと記し（ルカ1・38、2・19、51）、イエスの公生活中も、少なくとも熱心な祈りを通して

その身近にあつて、御子に伴い続けたことを暗示している。ヨハネはカナの婚宴でのイエスの最初の奇跡のことを述べながら、聖母が「何でもこの人の言う通りにしてください」と給仕たちに命じた（ヨハネ2・5）と記し、イエスに従うように人々に勧めている姿を伝えている。それはまさにイエスの公生活中のマリアの態度のすべてを語っている、と取ることができよう。

イエスの幼少年時代における聖母の参与を「喜びの神秘」で、死と復活における参与を「苦しみの神秘」と「栄光の神秘」で黙想してきた教会に、これに加えて、これから、公生活における聖母の参与をも「光の神秘」で黙想し、聖母の助けによってキリストの神秘により深くあずかる道が開かれたことは、本当にすばらしい。





本原のおじさん



戦中・戦後に小神学校で育った私の記憶にあるのは、空腹だけである。同じかまの飯を食べる育ち盛りの私たち21名は、いずれは司祭になる「金の卵」たちであった。神父様たちは、飢えさせては、とあらゆる手を尽くして食糧確保に大変だったようだ。しかし、配給は必要な3分の1にも満たない。頼みは信徒のみなさんから寄せられる芋やカボチャ、麦や大根などである。

芋の季節になると、食卓には毎日芋が盛られていた。ご飯は湯飲みより少し大きめのお茶碗一杯だった。一番おいしかったのは、擦りつぶしたカボチャに大豆やカボチャの若芽の入った雑炊だった。涙を流しながら飲み込んだのは、本来は馬食用の大豆の絞りかすだった。どんなにひもじくても、これだけはお湯で流し込まないと喉を通らなかった。

だからといって、この金の卵たちは実家に帰ろうとはしなかった。実家もこれに劣らず貧しかったからである。

今、教区維持費のことが論議されている。論議のなかで一番問題になるのは、司祭養成費用のことのようだ。聞くところによると、教区費用の半分は養成費に消えてしまうそうだ。一人の司祭が誕生するまでに16～7年、その間の費用は2～3000万円は要るだろう。

それはまだ良いとして、「金の卵」たちが見事に孵化し、祭服に身を包むのは、十人に一人か二人いれば上々という成果だそうだ。どう考えても、不合理な話である。つまり、ハマチ養殖に例えると、歩留りが一割にも満たない勘定になる。これでは、倒産もいたしかたがないであろう。

話を食糧難に戻そう。食料不足を補うために、わたしたち小神学生は、信徒の農家を回って托鉢の真似事をしていた。芋の季節、キャベツの季節、

その時どきになると、彦山のふもとから大八車を引いて、西山から一本木、そして本原、高尾と回り、浦上教会の下を通って帰院する。満載になった車を前から引き、後ろから押して本河内の坂道を登るころには、夕日が沈みかけていた。

苦しかったけど、楽しいこともあった。一本木（現在の本原教会の近く）の片岡さんの家では、お昼になると、皆を家にあげて昼食をごちそうしてくれた。銀めしだった。その家は原爆で崩壊して今は跡形もないが、70の歳を越えた今でも、本原教会の下を通るときは、あのおいしかった銀めしと腰の曲がったお婆さんのお顔を思い出す。

ある年、それはキャベツの収穫の頃だった。「本原のおじさん」は私たちを畑に案内して、「こっこの畑の分は公教神学校、あっちの畑は聖母の騎士の分じゃけんのう。人手の足らんけん、自分たちで採っていかんね。」そう言って、惜しげもなく笑顔で畑一枚分をくださった。その畑の分だけで大八車が満載になった。あとで聞いたところによると、そのおじさんは、苗分けをするときからそう決めていたとのことである。

戦中、戦後、食糧事情の厳しさは日本国中みな同じだった。大八車一台分は、売れば相当の金額になったはずである。今はどうか知らないが、当時は、神学生というだけで、知らない村に行っても大切にしてもらった。朝のミサの帰りに、宿者さんから声をかけられて、友人たちと一緒にごちそうにあずかったこともあった。

残念ながらその小神学生は、祭服を身につけるころまで神学校生活を続けることはできなかったが、教会や司祭を大切にすることを信者のみなさんから教えていただいたことを、今も心から感謝している。

(水浦久之)



青少年委員会

「青少年委員会」は、現在教区司祭7名、修道司祭2名の9名で構成されています。その対象は高校生と青年です。長崎教区にとって大切な、将来の担い手をその対象としているわけです。委員会は、その第一期活動の柱を次の三つとしました。

第一、高校生、青年たちの活動のための資料の収集、および他教区の活動の視察

第二、高校生、青年たちの活動の場の創造

第三、大司教主権で三年に一度行われる青年の聖地巡礼のお世話、ワールド・ユース・デイへの参加のお世話、高校生大会や青年たちの大会のお世話

しかし、現在の委員会活動は、あまり活発とはいえません。決めた計画も、すでにその集まりがあれば実現可能なのですが、高校生たちは、その組織がある程度存在するので歩み続けることができるとしても、青年たちには組織がないので、最初の段階で暗中模索を繰り返しています。

このように高校生と青年たちとの状況には大きな相違があるので、最初は全体で行っていた委員会の運営も、二つに分けることにしました。

(1) 青年担当部

辻原神父(生月教会)を中心にして、かつて活発であった青年会活動の復活を目指して



主の御変容の教会

奮闘中です。他教区からは、カナダのワールド・ユース・デイに150名の青年を送りました。残念ながら、長崎は0です。全国には、青年たちの連絡協議会を作って活動しているという動きがありますが、長崎からは有志が参加しているのみです。この人々の外からの呼びかけに答えてくれる青年が出てくれれば、と願っています。委員会でもそのような人を探しています。どうか、やってみようという意気込みのある青年を紹介くださいませんか。

すでに行われた青年の聖地巡礼に参加した

人々は、「オリブの会」なるものを作って、連絡を取り合い、絆を大事にしています。第三回が行えればよいが、と希望しています。ある地区では青年たちのための黙想会が行われているので、その機会をうまく利用できる方法がないかも検討しています。

(2) 高校生担当部

山村神父(大曾教会)を中心にして、高校生の活動を維持しています。各地区の組織も何とかありますし、教区全体の動きもあります。春にはリーダー研修会を開き、夏には高校生大会を開く計画を持っています。しかし、まだ高校生たちは司祭に頼りすぎなので、高校生が中心になって活動を行えるようになるにはどうしたらよいか、と思案中です。

先日の教区司祭の黙想会中に、委員会主催で自由討論会を開催いたしました。その中で目をひいたのは、青年たち、高校生たちの活動を活発にしたいためには、時間を惜しまず彼らと向き合う専従司祭が必要だ、という意見でした。一考に値する意見ではないでしょうか。

